

Title	自分なりにできることを前向きに実践(第 11 回ピア・スーパービジョン)
Author(s)	篠崎, 洋治
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.1, 2013.9 : 22-23
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4601
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

自分なりにできることを前向きに実践 篠崎 洋治

聖学院卒業後に(知的障がい者更生施設の職場に就職し9年目を迎えています。今回のピア・スパービジョンでは支援計画に基づいた活動の不足に対する、特に自分の生活担当者への申し訳なさや、そういった不甲斐無さを感じながらも現状の打開に踏み込めない諦めと罪悪感がある事などについて報告をさせて頂きました。

私の職場の施設では、ご利用者の基本的なグループ活動として、外気浴や衛生支援など健康維持を目的としたグループ、歩行を中心に軽運動による健康維持・向上を目的としたグループ、ピーズ製品づくりなど簡単な手作業も行うグループ、鶏の飼育や農作業を行うグループ、一般企業から請け負う工賃作業を行うグループなどに分けています。また月水金曜日の入浴や、それ以外にも定期的にコーラスサークル(特定のご利用者が所属)・法人内別施設の喫茶店への外出・散髪(床屋さんが来

る)・法人内別施設のパン・菓子製造の施設にパン作り体験・当事者委員会「みんなの会」などを行っています。さらに月ごとそれぞれに行事があり、夏祭りなど自主開催の行事やそのほか地域イベントへの出店なども含めて例年25件前後、防災訓練、近隣の公園や道路のゴミ広い活動、近隣中学生の体験学習などもあります。職員の業務については、常勤の職員を中心に、生活担当業務以外に年間の業務分担として資料管理や備品準備・広報誌の編集・マニュアル委員など40ほどの係りを分担しています。大きな自主開催行事の例として、夏祭りでは準備期間に2ヶ月間ほど費やされます。全体活動として活動内容を制限し、職員が準備業務にあたる事になります。

各係業務も同時に行っている中で、ご利用者に必要と思われて設定した支援計画の活動の時間が確保できない現状だと私には感じられます。個別支援計画に沿った活動の提供が、他業務に「ある程度」影響を受けるのは仕方のない事だという風潮がこの現状を作っているのではないかと思います。実際にご利用者と接していて、「仕方のない、ある程度」がどの程度かと悩みます。

自分なりに冷静にこういった状況の必然性・必要性にも目を向けるといくつかの意味は見つける事ができます。例えば、実際に支援計画・総括では保護者面談を通して説明・了承を得ており、その上での活動状況である事、市内有数の規模の法



人であり新施設の設立や地域に向けた活動が必要である事、行事やその他のイベントをご利用者は楽しみにしている事などがその意味としては挙げられます。イベントにご利用者が楽しんで参加して下さっている姿には準備の苦勞を吹き飛ばしてくれるような感動がありました。やはり意味はあるのだと思います。ただ、そのように考えてみても、業務やイベントの簡略化・規模の縮小をしてでも、ご利用者のいつもの活動を大切にしようという方向性が必要なのではないかと感じてしまいます。

初めは拒否の強かった担当ご利用者と悩みながらも共に歩んで活動を行ない、感じられた変化や信頼の獲得の実感・達成感などは何にも変えがたいものがありました。個別支援計画に沿った日課の確保を訴えたい気持ちはあります。しかし同時に、そう感じていても提案に踏み込めない自分自身の仕事としての情熱・立ち向かう余力・勇気・社会的には不備が無い事が示す意味・求められている事への自分の認識が正しいのか・組織のあり方に臆して提案する勇気や自信が持てない、など不甲斐無さを感じてご利用者に対して申し訳なく思う気持ちがなくなる事はありません。

気持ちの揺らぎをそのままに、まとまらない報告となってしまいましたが、皆さんからは同様の葛藤だけではなく、また違った立場からの葛藤なども聞かせて頂く事ができました。また何より、自身の葛藤について吐露できる事への気持ちよさ、安心感を強く感じる事ができました。全体の総括もして頂き、働く上で感じる不足などフラストレーションを感じながら内省し振り返りを持つ大切さを教えて頂くと共に実感する機会となりました。自分なりにできることを前向きに実践していこうと思います。

(しのぎき・ようじ 障がい者施設に支援員として勤務、2003年度聖学院大学人間福祉学科卒業)